



Title	大学専門教育課程における英語教育のあり方
Author(s)	成田, 康郎
Citation	経営と経済. 2007, 87(2), p. 53-68
Issue Date	2007-09
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10069/21372">http://hdl.handle.net/10069/21372</a>
Right	

This document is downloaded at: 2019-06-20T15:57:23Z

# 大学専門教育課程における英語教育のあり方

成 田 康 郎

## Abstract

It is of the utmost importance for university students majoring in economics to be able to read and write English sentences on economy, as well as to orally communicate with proper pronunciation and intonation. Mainly based on my own experience of teaching English to university students, I would like to propose some methods to help them achieve such goals. For example, university students do not seem to have much difficulty in memorizing a number of technical terms in English, provided that they are advised not to be too nervous about spelling mistakes. Writing can be remarkably improved by weekly submission of short essays in English to be corrected with some unique methods.

**Keywords:** English, technical terms, writing skills, reading skills, unique methods, short essays, oral communication, intonation, pronunciation

## 1. はじめに

学校における英語教育の在り方ほど、様々な意見のもとに種々の改善が試みられている教育テーマはめずらしいと言えよう。ただし、その多くは高等学校までを対象としており、大学での英語教育について論じた書籍等は多くはない。その主因としては、多種多様な専門学部に分かれていること、「高校入試や大学入試における英語」のように、卒業時に英語の関門が待ってい

るわけではないこと、といった点が考えられる。

しかしながら、経済・社会のグローバル化、年功序列から能力主義への移行、情報化社会での英語の使用頻度の高まり、といった観点からして、大学における英語教育の重要性は、顕著に高まってきていることは否定し得ないと考えられる。たとえば、本年6月に、当長崎大学経済学部では「知の創造と発信」というテーマで企業のトップ級の方々の講演をいただいたが、今井彰デルフィス社長（元トヨタ・マーケティング・ヨーロッパ社長）、佐藤俊一電通顧問（元ベルギー大使）、永田宏早稲田大学院客員教授（元三井物産副社長）が、いずれも英語力を大学時代に磨くことの重要性を特に強調されていた。

ひとくちに英語力といっても、英語検定試験のような総合的な英語力、外人と意思疎通をはかれるだけの会話力、さらには様々なレベルの語彙力など、多くの側面があり、いずれも重要であることは言うまでもない。本稿では、筆者の経済学部での英語授業での経験をベースにしつつ、専門科目、つまり経済に関連する英語力の向上という切り口から考察してみたい。もっとも、その経済関連の英語力の充実が、総合的な英語力の向上と表裏一体であることは論を待たない。また、授業にあたっての学生との双方向性が重要な柱となるが、筆者の経験では、150人程度までであれば双方向性を十分に確保することは可能である。

## 2. 経済学部生に求められる英語

一般に、経済学部生に求められる英語力とはどのようなものであろうか。まず「読み」と「書き」については、以下の2つが考えられる。

- 1 無論、就職活動などを意識してTOEICを受験する学生も多い。ただし、高校入試や大学入試における英語ほどまでに必要性が高いわけではないというのが一般的な見方である。

- (1) 専攻した学問に関連することを、ある程度英語で書けること。これには、①単語を英語で表現できること、②文章を英語化できること、の2ステップがある。
  - (2) 専攻した学問に関連する新聞・雑誌記事を読めること。
- 次に、「話す」と「聞く」については、以下の3点が考えられる。
- (3) 発音をネイティブのものに近づけること。それには、①イントネーション（抑揚）、②個々の母音や子音の発音、の2種類がある。
  - (4) 専攻した学問に関連する英語放送が理解できることが望ましい。
  - (5) 専攻した学問に関連することを英語で会話・討論できることが望ましい。

本稿では、上記のうち、比較的個人差の生じにくい(1)～(3)のそれぞれについて、有効策を検討してみたい。

### 3. Writing

一般に、専攻した学問に関連することを英語で書ける大学生は非常に少ない。その要因としては、①そもそもの英語力の欠如、②そもそもの英語に対する熱意の欠如、のほか、仮に一般的な英語力や熱意を十分に備えている学生の場合であっても、③専門用語を覚えられないはずがなかろう、というある種の諦念、④もともと日本語における専門用語自体であっても内容の理解に不十分さが伴っていること、といった点が考えられる。

しかしながら、実際には、③の諦念は不要であり、④については、英語で専門用語を教える際に改めて確認できるように工夫すればよい。そして、専門用語を覚えられれば、②の熱意は自然に沸いてくるし、さらに文章を書けるようになれば、①の英語力自体も改善してくることになる。

## (1) 専門用語

経済学部生が英訳できることが望ましい専門用語としては、たとえば以下のようなものが挙げられる。

- ① 理論・景気関係：経済成長，好景気，不況，世界恐慌，景気の波，底打ち，上昇局面，下降局面，横ばい状態，需要，供給，限界費用，独占
- ② 貿易関係：貿易収支，貿易黒字，貿易赤字，貿易不均衡，貿易摩擦，関税，自由貿易協定
- ③ 金融関係：中央銀行，金融機関，証券会社，直接金融，間接金融，株式，(株価の)全面高，債券，国債，円建外債，投資信託，証券取引所，上場，口座，預金の預入れと引出し，要求払い預金，定期預金，自動現金受払い機，融資，住宅金融，小切手，決済，投資，投機
- ④ 会社関係：社長・理事などの役職名，人事部・研究開発部などの部署名，本店と支店，子会社，合併，買収
- ⑤ 営業・物流関係：製造業者，卸売業者，小売業者，倉庫，在庫，出荷
- ⑥ 環境関係：地球温暖化，温室効果，二酸化炭素，排出，京都議定書，大気汚染，光化学スモッグ，水質汚濁，砂漠化，森林減少，オゾン層破壊，絶滅のおそれのある種
- ⑦ その他：外貨準備，二国間と多国間，持続力のある成長，円高と円安，時事用語（少子化，郵政民営化など）

そして、授業でこれらを教えたうえで、試験を行ったところ、多数の学生がほとんど全てを英訳できるという結果を得た。それらの学生の中には、英語の初級者や、必ずしも英語に対する熱意が高くない者も含まれていたと推察される。すなわち、一般に、専門用語を英語で言えるようになること自体は、さほど難しくはないことが実証的に言えることとなる。その際、工夫した点を敢えて挙げれば、以下の2点である。

- ① 図解を多用することにより、英語の専門用語のみによる思考回路も作れるようにすること。たとえば、二酸化炭素→排出→温室効果→地球温

暖化→京都議定書をそれぞれ英訳したものを「→」などで結びつけることにより、それが可能となる。つまり、各自の頭のなかで、英語でのメディア的回路がリレー式にできあがることとなる。

- ② 試験の際には、スペル・ミスが大きく減点はしないこと、そしてそれを予め学生側に周知しておくこと。上記の諸単熟語を含めて数百の用語を一度に試験するのであるから、そもそも学生の負担は少なからぬものがある。そして、一箇所でもスペル・ミスがあると得点を与えないのでは、学生のプレッシャーと準備時間は格段に増加してしまう。そして、上記のように予告した結果、スペル・ミスは実はかなり少なかった。その最大要因としては、プレッシャーから解放されたことにより、かえって気楽にスペルまで正確に覚えることができたことが考えられる。また、日本では、高校までに習う基本単語・中級単語でスペルを重視しているので、学生の頭の中には、「個々の音に対応するスペルのパターン」がしっかりと刻まれていることも重要な要因であろう。つまり、そうした基本訓練に立脚すれば、大学で上級単語、実用単語を教える際にも、音を重視して教えることにより、スペルもかなり正確に覚えることができる、という点が指摘できよう。(これは、英語が表音言語であることの帰結でもある。)

## (2) 文章の作成

経済関係の英語を作成できるようになるという目標に直接到達することは困難であり、以下のように4ステップを経ることが現実的かつ有効と思われる。無論、しっかりとした構文力を既に有している学生の場合など、ケース・バイ・ケースで2番目以降のステップから入ることは可能である。

- ① 構文力をある程度完璧なレベルにする。

まず、各学生が書きたいと思う内容を、自由に英訳させる。すなわち、自

由英作文を書かせることとなるが、そのテーマは経済に関係するものでなくても構わないこととする。普段書くことに慣れていない学生の場合には、多数の文法ミスもすることになるが、文法ミスについては2通りの対応をとる。品詞の間違い、語順のミス、動詞の活用形の選択ミスに代表されるように、構文力に直接関わるミスの場合には、なぜ間違いであるかを徹底的に記して説明し、次回以降は常に注意・改善するよう指導する<sup>2</sup>。他方で、前置詞のミスや冠詞のミスなどは、構文上大きな影響を与えることは少ないので、無論指摘はするものの、注意喚起は弱めにとどめる。

単語については、頼り過ぎない範囲で辞書の使用を認め、それでもどうしても英訳できない箇所は、日本語のまま置いておくことを認める<sup>3</sup>。適当でない単語が使われていたときには指摘することは無論であるが、仮に間違いでなくとも、より自然な単語がある場合には、その旨指摘する。また、参考となる表現などもできるだけ多く記すようにする。

添削の際に留意すべきは、ミスを指摘するよりも、上手な表現や、多少間違っているけれども難しめの表現にトライした事実などを積極的に評価・賞賛することの大切さである。そして、上記のように、ミスに対しては、種類や程度によって、指摘などの仕方を区分けしていくことが肝要である。

このようにして自由英作文の添削を反復することを通じて、構文に最大限注意しながら、自らが考える文章をかなりの程度英訳できるようになれば、第1ステップは完了である。なお、1点付言すると、単語力の欠如によって英訳できないことは、構文を完璧にする上では大きな支障とはならない。つまり、正確に言えば、必ずしも単語を正確に訳せるわけではないという留保つきで、自由に構文力<sup>4</sup>を発揮できるようになることが目標である。

2 そして、次回以降、当該ミスが是正されていたら、それを大いに賞賛することが肝要である。

3 このような、言わば「混文」は、英作文のアレルギーを除去するために効果は大きいと考えられる。

4 品詞別に言えば、例えば、動詞は構文力に関係する度合いが比較的高く、名詞は比較的低い。

## ② 長い英文を書くことができるようにする

基本的な構文力が身についたら、次のステップは、長めの文章を作成できるようにすることである。そのためには、to 不定詞や that, as, though などの接続詞を正確に使用できるようにするとともに、関係代名詞や分詞構文<sup>5</sup>を使いこなせるようになることが必要であるが、逆にいえば、それで十分とも言える。接続詞や関係代名詞は、数は多くないし、文法上の留意点もさほど難度は高くない。とくに、関係代名詞は、ひとたび使えるようになると、多用してみよう、また、省略できるところは省略してみようという学生が多いといえる。要は、積極的なトライ・チャレンジの推奨が有効と言えよう。

さらに、in light of, with respect to, as well as などの句を使えるように指導することにより、一段と複雑な文章を書くことが可能となる。

## ③ 副詞と形容詞を効果的に使用できるようにする

英語に限ったことではないが、文章には論理展開のわかりやすさが求められる。そのためには、まず、接続詞のほかに、文頭での副詞や副詞句が有効である。たとえば、furthermore, on the other hand, in this respect といった基本的なものから、やや高度な incidentally, alternatively, eventually, in a nutshell といったものまで相当数あるが、慣れればさほど難しいわけではないので、積極的にトライしていくことを推奨すべきである。

また、同じく相手方の理解を促進するものとして、度合い・程度を明示することがある。そのために形容詞や副詞が有効であることは言うまでもないが、一般に学生の書く英文には形容詞や副詞が少ない。そこで、できるだけ多く使うことを推奨する。たとえば形容詞の場合であれば、文脈上、opinion には strong を付して strong opinion にする、need は urgent need にする、

---

5 分詞構文は、文章が必要以上に固くなる場合も少なくないため、指導には注意を要する。



role は critical role にする，といったことがとくに問題ない場合には，使用を奨励する。（レベルが高い学生には，更に pivotal role のようなものも指摘する。）無論，そうした形容詞や副詞を過度に使うべきではないが，常に意識するということが自体が上達の教養的近道であると考ええる。

④ 経済に関する文章を書けるようにする

③まで到達できれば，事実上最終ステップ，すなわち経済に関する文章を書くことは難しくはない。というのも，（1）で記したとおり，専門用語自体を覚えることは実は難しくはないからである。（厳密に言えば，専門用語とまではいかないが，経済に不可欠な用語，たとえば競争力，海外拠点といった語句や，launch, diversify などの頻出動詞も習得しておくべきことになる。）

実際に，授業では，金融機関の合併，国際機関の機能，環境問題と開発といったテーマでの英文をかなり上手に作成できるレベルまで到達できた学生も少なくなかった。

ところで，以上の4ステップと平行して，多くの英文を覚えるという作業も奨励したい。自由に英作文を書ける，というアウトプットのためには，できるだけ多くの自然な英文のインプットが極めて有効となる。英作文は，そうした多くの英文それぞれが持つピースを組み合わせていくことが上達の早道であると考ええる。いわば，英作文は「英借文」であるといえよう。ちなみに，大学受験のために500ほどの英文を記憶する高校生もいるということからしても，大学生にとって，英文の記憶は難作業と決めてかかるほどのものではあり得ない。もっとも，記憶の得手・不得手には個人差がある。また，「受身的な記憶」よりも「能動的な記憶」の方が効果も高い。したがって，授業においては，自らが作成した文章を添削後に記憶することを奨励し，後述のとおり，それを試験にも取り入れたところである。

## 4. Reading

ここでは、新聞や雑誌の経済記事を読めるようになることを念頭に書く。そのためには以下の2ステップが考えられる。

### (1) 新聞・雑誌記事に慣れる

多くの学生にとって、英字新聞・雑誌を読むことにはかなりの抵抗がある。その要因として挙げられるのは、①もともと日本語の新聞もあまり読まない、②どうせ難しくて理解できないという諦念、③頑張って読み始めても、知らない単語が出た段階で give up してしまう、といった点であろう。

こうした諸点に鑑みれば、第1ステップとしては、関心の沸くような新聞記事から親しんでいくことが有効である。つまり、経済とはおよそ無縁なテーマから始めることでも構わないこととする。

日本の一般紙と比して、英字新聞では、スポーツ面が格段に多かったり、音楽や芸能関連の特集が組まれていたりする。これは、大学生にとって、このうえなく好都合であると言える。

では、そうしたもののなかからピックアップした関心のある記事を実際にも読めるようになるためにはどうすればよいか。いくら関心があるといっても、単語の壁は多かれ少なかれあるし、文章の構成がわからない場合もある。

したがって、まずは構文力を完成させる必要があり、そのためには「Writing」で記したとおり、多くの自由英作文を書いて、添削を受ける、というプロセスを繰り返すことが肝要となる。つまりは、Writing と Reading を並行して上達させるということでもある。(Reading は、とくに指導者がいる状況では音読が望ましい。ヒアリング能力を飛躍的に向上させるためにも、音読は不可欠である。)

一方、単語については、なるべく前後から想像することを推奨すべきであるが、知らない単語が多すぎる場合にはそれにも抵抗感がある場合もある。

そこで有効なのは、英単語混じりの日本文で訳してみる、という方法である。たとえば、○○ became the champion for three consecutive years, and five times in a decade. という文章があり、ある学生は consecutive と decade を訳せないとする、「○○は 3 consecutive 年、そして a decade の中で 5 回優勝した」と訳す。そうすればオリジナルの英語の時よりも意味を想像しやすくなるし、結果的に、当該単語を記憶することも自然なプロセスの一部になると考える<sup>6</sup>。

このようにすれば、関心のある新聞記事は読めるようになっていくものと考え<sup>7</sup>。

## (2) 経済関連記事を読む

次のステップは、経済記事を読むことである。これについては、(1) で新聞記事一般への抵抗感が薄まれば、さほどハードルは高いものではない。ただし、その前提として、「Writing」で記したように専門用語を習得していることが必要である。もっとも、それでも自分の知らない専門用語に出会うこともある。その場合には、(1) と同様にして意味を想像することが有効である。また、全体を何とか訳せても、内容自体が理解の限度を越えてしまう場合もあろう。そういう場合には、指導者の help が多かれ少なかれ必要である。さらにいえば、日本語に訳したレベルで当該学生が内容も把握できるような記事を選ぶ役割自体も、少なくとも初期段階では指導者が担うことが望ましい。

こうした作業を続けていけば、経済記事も徐々にではあるが読めるようになると考える。なお、経済記事といっても、一般英文紙の経済記事と、経済

6 こうした「混文」に過度に依存することは避けるべきだが、本文中に記したとおり構文力がしっかりしていれば、依存度が過度になることはないと考えられる。

7 新聞には特有の表現も見られる。たとえば、on Sunday の on を省略したりする。そうした点については、指導者の側でも留意すべき点と言える。

専門英文紙の経済記事とでは難易度に相当な差がある。したがって、経済専門紙の記事を題材にするのは、英語力、経済関連の実力ともに相当程度有する学生に限るべきであろう。

## 5. Intonation and Pronunciation

一般に、英文を美しく音読できるということは、英語力向上のうえで必須条件と捉えられてはいないようである。しかしながら、大学の授業でこれらを教えることは望ましいと考える。なぜなら、後述のとおり、とくにイントネーションを修得することが、英文を覚えるうえで不可欠となるからである。

以下では、イントネーションと、個々の発音の向上策について考察してみる。

### (1) イントネーション

英語を母国語とする人々の場合、それぞれイントネーションのパターンを持っていることが多い。そうしたもののなかから、一つのパターンを軸として授業では解説・実践した<sup>8</sup>。それは、文章（とくに、長めの文章）の途中の切れ目<sup>9</sup>では語尾を上にあげて、最後、つまりピリオドの箇所では語尾を①いったん上に上げつつ最終部分のみ下げる、あるいは②下に下げる、というパターンである。

このパターンを基本例文で解説・実践したのちに、個別の学生ごとに試験の一環として当該例文を音読してもらったところ、多数の学生が実践できるという結果を得た。（ただし、別の年度において、添削後の自由英作文を暗

8 無論、イントネーションのパターンを一つのみ固定化する意図はなく、あくまでも当初ステップとして当該パターンを推奨するものである。

9 切れ目は、練習の初期段階では多めに設定することが有効である。実際のネイティブ・スピーカーはそれよりは少なく設定しているが、練習効果を高めるためには多めに設定することが有効である。

記したうえで個別に暗誦するという試験を実施したところ、上記のようなイントネーションを実践できた学生の数は減少した。その理由としては、暗記した英作文を復元するという慣れない作業に神経が集中するあまり、イントネーションがややおろそかになってしまったことが考えられる。この点は反省し、今後の要改善事項と認識している。）

## (2) 個々の発音

個々の発音のうち、以下では、特に重要と思われるものを例示する。

### ① r の発音

個々の発音のうち、まず、日本人の間に苦手感の強い「r」については、授業で下記のように教えている。

ア) 日本語の「ア行 (つまりアイウエオ)」、「カ行」、…「ラ行」を各自に発してもらう。

イ) 上記のなかで、舌を上歯の付け根に接しないと発音できないものを挙げてもらう。その結果、各自、「タ行」、「ナ行」、「ラ行」を挙げる。

ウ) 当該3行を、舌を上歯の付け根に接しないようにして無理に発音してもらう。その結果、「タ行」と「ナ行」は何を発しているか不明となる。しかし、「ラ行」は不明瞭ながら無理に発することができる。これこそが、英語の「r」の発音である。

エ) 以上を理解・実践したうえで、まずはrで始まる英単語で練習する。

オ) エ) ができるようになった段階で、途中や最後に「r」が出てくる英単語を練習する。

特に、エ) やオ) において「r」と「l」の明確な区別のために有用な単語ペアは、以下のように数多く存在する。

right, light    rent, lent    ray, lay    rock, lock    rate, late    row, low  
wrong, long    road, load    rap, lap    rain, lain    rye, lie    rake, lake

rack, lack rice, lice read, lead reader, leader rocket, locket  
rip, lip rid, lid ramp, lamp Rhine, line revel, level ray, lay  
fright, flight frame, flame fry, fly free, flea correct, collect  
grass, glass pray, play

## ② f, v, th の発音

次に、英語特有の発音である f, v, th については、発音自体が難しいというよりも、文中に頻出するあまり、わかっているもついついおろそかにしてしまう、という学生が多い。これに対する有効策としては、普段の日本語会話のなかで、f, v, th を使用する英単語が日本語化したものを使用する際に、英語式に発音することを奨励することであろう。たとえば、語頭に来るものだけでも、フォーク、フルーツ、フランス、ポーカル、サンキューなど、相当数にわたる。(そもそも日本語の日常会話に使用される英単語は、想像もできないほどの数にのぼっている。)

以下の③から⑥では、そもそも英語特有の音とは認識していない学生が多いために、正確に発音できていない場合が極めて多いものを取り上げる。

## ③ 口を縦に開ける「a」の発音

たとえば hard と heard では、前者では後者よりも口を縦に開けるという意味で、発音は全く異なる。これは専ら認識できているかどうかの問題であり、意識できていれば、容易に発音できる<sup>10</sup>ものである。

そして、学生に効率的に意識してもらうためには、音の表記を工夫することが有効である。授業では、英単語の読み方のうち難しめものはカタカナで紹介することが多いが、hard の「a」のような場合にはひらがなの「あ」

---

10 引用例の場合には r が入っているので、①で r の発音ができるようになっていることが前提となる。

を用いることによって注意を喚起するという方法をとっている。

#### ④ 二重母音

英語では二重母音の単語が極めて多い。かなり短いものに限っても、eight, out, over, mail など、枚挙にいとまがない。そして、日本語では、eight や out は文字通り二重母音式に発音するのが通常であるが、over や mail の場合には「オーバー」、「メール」という発音が通例である。

これについても、③と同様に、認識し、意識していれば対応できるものであり、そのために、それぞれ「オゥ」、「エイ」のように表記して注意喚起することが有効である。

二重母音の練習にあたっては、同じ二重母音を使用する三個の単語を連続して発声することが有用である。例えば以下のとおり。

eight→mail→Asia

ice→rise→fly

boy→voice→toy

out→town→cow

hope→over→know

#### ⑤ p や b などの発音

子音の発音の重要性は看過されやすいが、たとえば p や b の発音は極めて大切である。すなわち、唇を横に閉じてから息を強く吹きかけることが必要となる。

その練習法としては、1枚の紙を口の前に置き、pencil や basket といった語を発し、紙が揺れるようにする<sup>11</sup>というものが有効である。

11 ネイティブ・スピーカーは弱めに発音することもあるが、あくまでも初期段階の練習では強めに発音することが有効である。

## ⑥ w の発音

w で始まる単語については, when, why, where, why, well, water など, 頻出する基本単語が多いこともあり, 唇を「ウ」より更に小さくするようにして発音練習することが重要である。

## 6. 結 語

以上, 授業の実例をもとに, 経済学部における英語教育のあり方の一例を提示した次第である。無論, これ以外にも様々な有効な手法があろうし, 今後の授業でも新たな方法を模索していく所存である。以下, 全体に絡む点について, 若干の補足を加えたい。

### (1) イントネーションと英文暗記・暗誦の相乗効果

既述のとおり, 授業ではイントネーションの重要性と英文暗記・暗誦の重要性を強調しているが, これらは相乗効果をもたらすと考える。英文を暗記する場合, 通常は口で音声化しながら行うことになるが, その際しっかりとしたイントネーションができていれば, 暗記は格段に容易となる。(なお, この点について, 学生に対しては, 「カラオケでラップが得意な人は歌詞を自然に覚えてしまっている場合が多いであろう。では, 仮にラップに上下のリズムがなかったとしたら覚えることができたであろうか。」という問いかけをすると, 即「納得」のようである。)

### (2) 英英辞典使用の奨励

英語の上級者は, 英語で話すときに日本語を頭の中でいちいち英語に翻訳しているわけではなく, 英語のみの回路が完成しているものである。学生にとって, 英英辞典を普段から使う習慣をつければ, 上級者への近道になることは疑いないところであろう。最近の電子辞書は, 英和辞典を使用したあと



にワンタッチで英英辞典に切り替えることができるので、効率的に英英辞典に親しむことが可能である。中級レベルの実力があれば、当初に多少の違和感を覚えることはあっても、英英辞書を使用する習慣を身につけることは可能と考える。

### (3) 文系他学部における応用の可能性

本稿は経済学部生のケースを念頭に進めてきたが、法学部、国際関係学部など、他の文系学部にも該当する箇所が多いと推察する。例えば、法学の場合であっても、英語の専門用語を覚えることが経済学よりも困難であるとは考えにくい<sup>12</sup>。いずれにしても、文系諸学部における英語教育のあり方が様々な形で議論され、結果的に学生たちの英語力が向上することを切に望む次第である。(また、理系の学生についても、研究成果を国際的にシェアする必要性が高まっている今日、英語で論文を書いたり国際会議で発表したりできるだけの英語力を持つことを望む次第である。)

---

12 強いていえば、英語の法律条文を読みこなせるようになるためには、かなり複雑な構文を正確に理解することが必要になる。ただし、結局は基本的な構文の応用形にすぎず、慣れれば読解は可能と考える。